

報道関係各位

百年を超える日本映画史を一望に見渡す、空前の作品データベース。

三省堂『日本映画作品大事典』を2021年6月中旬に刊行。

～三省堂創業140周年記念企画 内容見本謹呈～

株式会社 三省堂（本社：東京都千代田区、代表取締役：瀧本多加志）は2021年4月に創業140周年を迎えます。この140周年を記念する企画として、『日本映画作品大事典』（山根貞男 編）を2021年6月中旬に発売します。本事典は、日本映画の「作品」を対象にした規模・内容ともに空前の作品データベースで、収録した監督数は約1,300、映画作品数は約19,500という、膨大な情報を集大成したものです。「日本映画の父」牧野省三の『本能寺合戦』（1908年）から2018年までを対象として、監督別に作品を収録しています。20年を超える歳月を費やして執筆・編集された大事典が、いよいよ完成します。発売に先立ち本書の内容見本をご用意しましたので、個人・団体を問わず、ご購入を検討される方に謹呈します。特設ウェブサイトに記載した所定の方法で三省堂までご請求ください。

【特設ウェブサイト URL】 <https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/jmovie/>

三省堂創業140周年記念企画

百年を超える日本映画史を一望に見渡す、
空前の作品データベース。

日本映画作品大事典

2021年6月中旬刊行!



100年を超える歴史をもつ日本映画の全作品を一望できる書物にしたい。これが本事典の企画の発案時に考えた基本的な編集方針である。そこに重要な一点が加わる。単なる作品リストにするのではなく、各作品に、どんな映画かが分かるような解説を、可能なかぎり付けることである。

(中略)

21世紀に入り、日本映画は多彩を極め、本数も飛躍的に増えており、新たな黄金時代の到来を予見できなくもない。そうしたなか、本事典が日本映画の豊穡な姿を未来に伝える役割を果たすことができれば、これに勝る喜びはない。(編者・山根貞男の言葉より一部抜粋)

本書『日本映画作品大事典』は、百年を超える歴史を持つ日本映画の「作品」を対象にした、B5判、3段組(索引4段組)、1,000ページを超える大著です。これまで十分な情報の集成がなされていなかった日本映画史に関する、「新たな基礎資料」となることを目指して編纂されました。

執筆陣は、映画研究者、映画評論家、国立映画アーカイブ研究員など約50名。収録した監督数は約1,300、映画作品数は約19,500。一般劇映画を中心に、記録映画、アニメーション、実験映画なども収録しました。映画監督事典としても最大級の規模となっています。

映画に関する情報はかなり錯綜していますが、本事典の編集に当たっては、信頼のおける基礎資料となることを目指して、紙・デジタルを問わず、できる限りさまざまな資料を精査し、流布されている諸情報の校訂、確定に努めました。そして、長期にわたる執筆・編集作業の集大成として、三省堂の創業140年である2021年という節目に、満を持して上梓する運びとなりました。

収録監督の一部 (約1,300名の収録監督のうち一部を紹介。五十音順)

青柳信雄	市村泰一	大友克洋	亀井文夫	小池征人	佐々木康	鈴木重吉	田中登	中原俊	原惠一	前田哲	村上龍	山中貞雄
青山真治	井土紀州	大友啓史	唐十郎	小石栄一	貞永方久	すずき	タナダユキ	中平康	原研吉	前田陽一	村川透	山根成之
芥川光蔵	井筒和幸	大根仁	川島透	河野寿一	佐藤純彌	じゅんいち	谷口千吉	中村登	原田隆司	曲谷守平	村田実	山内鉄也
朝間義隆	伊藤俊也	大庭秀彦	川島雄三	神山征二郎	佐藤肇	鈴木志郎康	田島恒男	那須博之	原田真人	牧口雄二	村野織太郎	山村浩二
安達伸生	伊藤大輔	大林宣彦	川頭義郎	五社英雄	佐藤真	鈴木清順	田村孟	並木鏡太郎	番匠義彰	牧野省三	村山新治	山村聰
足立正生	稲垣浩	大藤信郎	河瀬直美	五所平之助	佐藤祐市	鈴木卓爾	千葉泰樹	成田裕介	坂東玉三郎	村山三男	村山三男	山本嘉次郎
岡部豊	犬塚稔	大森一樹	河辺和夫	小杉勇	SABU	鈴木則文	塚本晋也	成沢昌茂	東陽一	政岡憲三	毛利正樹	山本薩夫
荒井晴彦	大重一心	大森立嗣	川本喜八郎	小谷承靖	佐分利信	鈴木英夫	辻吉朗	成島出	樋口源一郎	舛田利雄	望月六郎	山本政志
荒井良平	井上昭	緒方明	北野武	小谷ヘンリー	澤井信一郎	春原政久	土本典昭	成瀬巳喜男	樋口真嗣	増村保造	持永只仁	山本迪夫
安藤桃子	井上梅次	岡田敬	北村龍平	後藤信山	沢島忠	諏訪敦彦	筒井武文	西河克己	久松静児	松井良彦	本木克英	湯浅恵明
庵野秀明	井上和男	岡本明久	衣笠貞之助	小西通雄	沢田幸弘	瀬尾光世	堤幸彦	西川美和	日高繁明	松尾昭典	本広克行	湯浅政明
飯塚俊男	井上金太郎	岡本喜八	木下恵介	小沼勝	塩田明彦	瀬川昌治	円谷英二	仁科熊彦	左幸子	松岡錠司	森一生	行定勲
飯塚増一	井上芳夫	岡本忠成	木俣堯喬	小林悟	堀宗務	関川秀雄	坪島孝	西村潔	松川八洲雄	松川八洲雄	森達也	弓削太郎
家城巳代治	今井正	小川紳介	金秀吉	小林聖太郎	実相寺昭雄	関本郁夫	鶴橋康夫	西村昭五郎	廣木隆一	松田定次	森川英太郎	湯山邦彦
伊賀山正光	今泉力哉	沖島勲	木村恵吾	小林恒夫	篠崎誠	瀬々敬久	勅使河原宏	布川徹郎	深川洋洋	松田優作	森崎東	横浜聡子
井口奈己	今関あきよし	沖田修一	木村正樹	小林正樹	藤田正浩	想田和弘	手塚治虫	根岸吉太郎	深作欣二	松林宗恵	森田芳光	横山博人
井口昇	今村昌平	小栗康平	木村大作	小林弥六	篠原哲雄	相米慎二	手塚真	野口博志	深田金之助	松村昌治	森谷司郎	横山隆一
池田千尋	入江悠	小澤啓一	清瀬英次郎	小平裕	芝山努	曾根中生	出目昌伸	野田真吉	深田晃司	松本俊夫	森永健次郎	吉田重雄
池田敏春	岩井俊二	小沢茂弘	久世光彦	小森白	渋谷実	園子温	寺山修司	野田幸男	深田修造	松本元志	矢口史靖	吉田恵輔
池田富保	岩佐寿弥	押井守	工藤栄一	是枝裕和	島耕二	高木孝一	土井裕泰	野淵昶	福田純	松山善三	矢崎仁司	吉田大八
池田一夫	岩間鶴夫	小田基義	宮藤官九郎	今敏	島津昇一	高橋治	土居通芳	野村孝	福田晴一	真利子哲也	安田公義	吉村公三郎
井沢雅彦	上垣保朗	小津安二郎	熊井啓	崔洋一	島津保次郎	高橋伴明	富樫森	野村浩将	藤井克彦	丸根賛太郎	安彦良和	吉村廉
石井岳龍	牛原彦彦	小野田嘉幹	熊谷勲	斎藤耕一	清水厚	高畑勲	時枝俊江	野村芳亭	藤浦芳亭	丸山誠治	柳沢寿男	李相日
石井隆	牛原陽一	小原宏裕	熊谷久虎	斎藤光正	清水崇	高林陽一	富田克也	野村芳太郎	藤田敏八	万田邦敏	柳町光男	利重剛
石井輝男	内川清一郎	恩地日出夫	熊切和嘉	斎藤寅次郎	清水宏	高嶺剛	富野由悠季	萩庭貞明	伏水修	三池崇史	藪下泰司	若杉光夫
石井裕也	内田吐夢	堀山教正	神代辰巳	斎藤信幸	清水浩	高村武次	豊島圭介	萩原遼	二川文太郎	三木孝浩	山上伊太郎	若林栄二郎
石田勝心	内出好吉	箕正典	倉田準二	斎藤久志	志村敏夫	鷹森立一	豊田四郎	船橋淳	水谷俊之	船橋淳	山川直人	若松孝二
石田民三	浦山桐郎	風間志織	倉田文人	斎藤武市	下村兼史	滝沢英輔	豊田利晃	橋口亮輔	冬島泰三	瑞穂春海	山際永三	若松節朗
石原慎太郎	江崎実生	梶岡俊一	倉橋良介	佐伯清	白石伸明	滝田洋二郎	鳥居元宏	橋本一	古川卓巳	三隅研次	山口和彦	和田誠
和泉聖治	枝川弘	勝新太郎	蔵原惟二	佐伯幸三	白石和彌	瀧本智行	内藤瑛亮	長谷川和彦	古澤憲吾	溝口健二	山口清一郎	和田嘉訓
伊勢真一	榎戸耕史	勝間田具治	蔵原惟繕	酒井欣也	白鳥信一	内藤誠	内藤瑛亮	長谷川安人	降旗康男	三谷幸喜	山崎貴	渡辺邦男
磯村一路	遠藤三郎	加戸彰	栗原トーマス	酒井辰雄	新海誠	武田一成	中江裕司	長谷部安春	細田守	満友敬司	山崎徳次郎	渡辺邦彦
井田探	近江俊郎	加藤彰	栗山富夫	坂根田鶴子	新藤兼人	武智鉄二	中川信夫	羽仁進	細野辰興	三村晴彦	山下耕作	渡邊孝好
伊丹十三	大河原孝夫	加藤泰	黒木和雄	坂本浩一	周防正行	田坂勝彦	仲木繁夫	羽田澄子	穂積利昌	宮城まり子	山下敬弘	渡辺武
伊丹万作	大九明子	加戸野五郎	黒澤明	阪本順治	須川栄三	田坂具隆	長崎俊一	濱口竜介	堀池清	三宅唱	山田達雄	渡辺文樹
市川崑	大島渚	金井勝	黒沢清	坂元裕二	杉井	田中絹代	中島貞夫	林功	堀内真直	三宅隆太	山田典吾	渡邊祐介
市川崑	大曾根辰保	金森万象	黒沢清輔	佐々木啓祐	ギサプロー	田中重雄	中島哲也	林海象	堀川弘通	宮崎駿	山田洋次	渡邊祐介
一倉治雄	太田昭和	金子修介	黒田義之	佐々木浩久	杉江敏男	田中徳三	中田秀夫	原一男	本多猪四郎	向井寛	大和屋竺	

『日本映画作品大事典』の構成

「日本映画の父」牧野省三の『本能寺合戦』(1908年)から2018年までを対象として、監督別に作品を収録しています。監督名は五十音順配列。ほとんどの監督項目で、監督略歴の後に、フィルモグラフィー(作品履歴)を公開年月日順に表示しています。

ほとんどの作品項目に、作品情報(白黒/カラー、スクリーンサイズ、音声、長さ、スタッフ、キャストなど)

や、あらすじなどの解説を付しています。作品項目を含まない一部の監督作品では、監督略歴の中で作品について解説をしています。

くろさ

黒澤明

287

黒澤明

くろさ

黒澤明

くろさわ あきら | 1910-98(明治43-平成10)

東京・大井町生まれ。1927年に京華中学を卒業後、画家を志し、日本プロレタリア美術家同盟に参加する中、雑誌のカットや漫画を描く。36年、P.C.L.に入社。同社合併後の東宝映画も含め、助監督として主に山本嘉次郎に就く。『馬』(山本嘉次郎、41)ではB班監督を務め評価され、以後、山本組のB班のみ担当する。43年『姿三四郎』で監督デビュー。45年『一番美しく』(44)に出演した矢口陽子と結婚。『虎の尾を踏む男達』撮影中に終戦を迎え、同作はGHQの検閲を通過せず、公開は52年となる。第1次東宝争議の際は組合の企画による『明日を創る人々』(46)を山本嘉次郎、関川秀雄と共同監督する。48年、山本嘉次郎、本木荘二郎が結成した映画芸術協会に参加。49年より活動の場を広げ、大映、新東宝、松竹で撮る中、『羅生門』(50)がベネチア国際映画祭金獅子賞およびアメリカ・アカデミー賞特別賞を受賞し、世界的に注目される。『生きる』(52)で東宝に戻り、『七人の侍』(54)がヒットする。59年、東宝との提携で黒澤プロを設立。『用心棒』(61)『椿三十郎』(62)と連続ヒットを飛ばす。66年、黒澤プロは東宝から完全に独立し、日米合作の企画『暴走機関車』を発表するが、製作中止となる。68年、日米合作『トラ・トラ・トラ』を撮り始めるが、撮影中断を繰り返した末、69年降板する。69年、木下恵介、市川崑、小林正樹と四騎の会を結成し、カラー第1作『どすかでん』(70)を撮る。71年、自殺未遂。監督復帰作『デルス・ウザーラ』(75)がアメリカ・アカデミー賞外国映画賞を、『影武者』(80)がカンヌ国際映画祭パルムドールを受賞する。82年にはカンヌ国際映画祭で世界10大監督の一人に選ばれる。85年、映画関係者初の文化勲章を受賞。その躍動的な作品群は世界中の映画ファンを魅了し、スティーブンスピルバーグ、ジョージ・ルーカス、アッパス・キアロスタミら海外の監督からも敬愛される。また、助監督時代より脚本家として活躍し、『青春の気流』(伏水修、42)『銀嶺の果て』(谷口千吉、47)『殺陣師段平』(マキノ正博、50)『決闘屋の辻』(森一生、52)など数多くの脚本を手がける。著書に『蝦蟇の油 自伝のようなもの』『全集黒澤明』などがある。長男はプロデューサー黒澤久雄、長女は衣裳デザイナー黒澤和子。

姿三四郎

1943年3月25日 白黒 SD 97分 【製】東宝 【配】映画配給社 【原】富田常雄 【脚】黒澤明 【監】三村明 【美】戸塚正夫 【音】鈴木静一 【出】藤田進、大河内傳次郎、轟夕起子、月形龍之介、志村喬、花井蘭子、小杉義男 ※明治15年、若き姿三四郎(藤田)は柔術を志して上京するが、新時代の柔道を唱える矢野正五郎(大河内)の技に感銘を受け、弟子入りする。寺の道場で修行を積み強くなるが、慢心を矢野に批判され、夜中に池に飛び込み、朝、蓮の開花を見て悟りを開く。警視庁武術大会で柔術家村井半助(志村)と対決することになった三四郎は、親しくなった小夜(轟)が村井の娘と知って悩むが、試合に勝つ。さらに、半助

の弟子槍垣源之助(月形)を烈風の野原で破り、旅に出る。純真な青年が武術の修練を通じて精神的にも成長する姿を、師弟愛、淡い恋、相次ぐ闘いの中に描く。娯楽映画に飢えた戦時下の観客に受けてヒットすると共に、静と動の転変を駆使した演出力が高く評価された。原作は同名小説。

一番美しく

1944年4月13日 白黒 SD 85分 【製】東宝 【配】映画配給社 【脚】黒澤明 【脚】小原謙治 【美】安部輝明 【出】入江たか子、矢口陽子、谷間小百合、志村喬、清川荘司、菅井一郎 ※太平洋戦争末期、勤労挺身隊として動員された若い女性たちが、寮生活をしながら軍需工場でレンズ製造に携わる。増産強調運動の中、疲労の蓄積や病人の続出で感情的なトラブルが起こるが、寮母の水島徳子(入江)に見守られ、鼓舞の練習やバレーボールで英気を養い、組長の渡辺ツル(矢口)を中心に全員が仕事に励む。43年に始まった14歳以上25歳未満の女性の勤労動員に取材した国策映画。国家目的と集団と個の葛藤が精神主義で克服されていく過程を描く。

続 姿三四郎

1945年5月3日 白黒 SD 82分 【製】東宝 【配】映画配給社 【原】富田常雄 【脚】黒澤明 【監】伊藤武夫 【美】久保一雄 【音】鈴木静一 【出】藤田進、大河内傳次郎、月形龍之介、河野秋武、轟夕起子、石田雄 ※明治20年、柔道家姿三四郎(藤田)が、横浜で若い車夫に暴力を振るうアメリカ人水兵を懲らした後、矢野正五郎(大河内)の修道館に戻り、小夜(轟)と再会する。かつて彼に敗れた槍垣源之助(月形)の弟2人、鉄心(月形)と源三郎(河野)が挑戦状を届ける。三四郎は道場の自分の名札を外し、アメリカ人ボクサーとの試合に勝つ後、雪山で鉄心と源三郎を倒す。数々の闘いの中、三四郎の純真さと共に、源之助の人間味や弟2人の妄執、三四郎を慕う若い車夫の一途さが浮かび上がる。月形が2役。『姿三四郎』(黒澤明、43)の続編。

明日を創る人々

1946年5月2日 →山本嘉次郎

わが青春に悔なし

1946年10月29日 白黒 SD 111分 【製】東宝 【脚】久板栄二郎 【脚】中井朝一 【美】北川恵司 【音】服部正 【出】原節子、藤田進、大河内傳次郎、河野秋武、杉村春子、三好栄子、高堂国典 ※京大事件を題材に、弾圧に抗する戦時下の人々の不屈さを描く民主主義啓蒙映画。昭和8年、軍国主義の嵐の中、京都帝国大学の八木原教授(大河内)が大学を追われ、娘の幸枝(原)と親しい野毛(藤田)ら学生も検挙される。野毛の転向を知って幻滅した幸枝は、京都を去り東京で自活する。昭和16年、幸枝は、父の教え子である検事の志川(河野)から、野毛が中国問題の論客として活躍していることを聞き、再会する。2人は心を通わせ同棲するが、野毛がスパイ容疑で検挙され、幸枝も警察で連日尋問される中、太平洋戦争が始まる。幸枝は釈放されるが、野毛は獄死する。失意から立ち直った幸枝は、野毛の故郷へ向かい、村人からスパイの親として迫害されている野毛の老いたる父母(高堂、杉村)と共

に農作業に励む。敗戦で八木原は大学に復帰し、幸枝は農村で生きる決心をする。原が好演する幸枝の表情の微妙な変容を鋭敏な映像感覚で捉え、自我を貫く新しい女性像を提示する。同じ久板の脚本による『大曾根家の朝』(木下恵介、46)と共に、戦後映画の出発を告げる作品として評価された。

素晴らしき日曜日

1947年6月25日 白黒 SD 109分 【製】東宝 【脚】植草圭之助 【脚】中井朝一 【美】久保一雄 【音】服部正 【出】沼崎勲、中北千枝子、中村是好、清水将夫、渡辺篤、菅井一郎 ※雄造(沼崎)と昌子(中北)が、日曜日にデートをして東京を歩き回る。結婚後を考えてモデルハウスや賃貸アパートを見て自分たちの貧しさに直面し、飛び入りした草野球では失態で金を払い、雄造の戦友のキャバレーを訪ねて門前払いを食う。動物園を経て、雨の中「未完成交響曲」を聴きに日比谷公会堂へ行き、雄造はダブ屋と争い殴られる。雄造の下宿で、彼は昌子の体を求めて拒まれる。2人は月明かりの焼け跡で喫茶店開業の夢を語った後、無人の野外音楽堂で「未完成交響曲」コンサートを空想して、雄造がタクトを振り、昌子が客席に拍手を求めると、曲が流れ始める。貧しい男女の心のうねりをリアリズムで描く。その後、画面から観客に向かって拍手を促す昌子の姿により青春の夢を象徴する。

酔いどれ天使

1948年4月26日 白黒 SD 98分 【製】東宝 【脚】植草圭之助、黒澤明 【脚】伊藤武夫 【美】松山崇 【音】早坂文雄 【出】志村喬、三船敏郎、山本礼三郎、中北千枝子、木暮実千代、進藤英太郎、久我美子、千石規子 ※敗戦後の都会の底辺にうごめく人々の姿を写した、黒澤、三船出会いの作品。闇市近くの酒飲みの開業医真田(志村)が、手の銃創の治療にきたやくざ松永(三船)に肺病の疑いを告げ、後日、松永が持つレントゲン写真から重症と分かる。真田の粗末な医院の前の湿地はごみ捨て場になり、メタンガスが噴き出る泥沼と化し、ある夜、「人殺しの唄」を弾くギターの音が流れる。弾くのは松永の兄貴分が出所した岡田(山本)で、子分たちや松永の情婦奈々江(木暮)を支配している。看護師代わりの美代(中北)は、かつて自分を苛んだ岡田の帰還におびえる。啜血した松永は、親分に見捨てられたことを知り、奈々江のアパートの廊下で白ペンキに塗れつつ岡田と闘い刺殺した後、絶命する。真田は、肺病が完治したセーラー服の少女(久我)と仲良く歩き出す。敗戦後の混沌が泥沼に象徴され、その生命力を信じる真田と、そこでのたうつ松永の交流を温かく描く。虚無的で感受性の強い松永がアプレゲールの鮮烈な典型として注目され、映画がヒットすると共に、三船は一躍スターの座に着いた。

静かなる決闘

1949年3月13日 白黒 SD 95分 【製】大映(東京) 【原】菊田一夫 【脚】黒澤明、谷口千吉 【脚】坂本操一 【美】今井高一 【音】伊福部昭 【出】三船敏郎、三條美紀、志村喬、千石規子、植村謙二郎、中北千枝子 ※1944年、野戦病院の軍医藤崎恭二(三船)が、重傷の上等兵中田(植村)を手術中、梅毒に感

(組体裁・内容は編集途中のもので、実際と一部異なります)

巻末索引

本書は監督名の五十音順で配列されていますが、巻末には「作品名五十音順索引」と、「シリーズ五十音順索引」を収録しています。

作品名五十音順索引

Table with columns: ああお, 索引五十音, 983, 索引五十音, あおぞ. Rows list titles like 'あゝ君が愛' and page numbers.

シリーズ五十音順索引

Table with columns: ああぐ, 索引シリーズ五十音, 1055, 索引シリーズ五十音, おおぼ. Rows list series titles like 'あゝ軍艦旗' and page numbers.

(組体裁・内容は編集途中のもので、実際と一部異なります)

美しいブックデザイン

紅色の布クロス貼りの表紙に、黒色の箔押しを施した、美麗かつ堅牢な造本です。それを重厚感のある黒の筒函入りとしています。ブックデザインは鈴木一誌氏が担当しています。



発売記念特別定価を設定

『日本映画作品大事典』は2021年6月中旬に発売します。発売から2021年12月末日までは、発売記念特別定価41,800円（本体38,000円+税10%）といたします。2022年1月より定価47,300円（本体43,000円+税10%）といたします。

内容見本を謹呈

発売に先立ちまして、『日本映画作品大事典』の内容見本をご用意しました。個人・団体を問わず、本書のご購入を検討される方に謹呈します。『日本映画作品大事典』特設ウェブサイトに記載した所定の方法で、三省堂までご請求ください。

『日本映画作品大事典』特設ウェブサイト

【URL】<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/jmovie/>

編者略歴



山根貞男（やまね さだお）

映画評論家。1939年、大阪生まれ。書評紙や映画批評誌「シネマ」69～71の編集・発行を経て映画評論家に。雑誌「キネマ旬報」に「日本映画時評」を長期連載中。また、朝日新聞の映画評を担当。『日本映画時評集成』全3巻、『マキノ雅弘 映画という祭り』など著書多数。『映画監督 深作欣二』『俳優 原田芳雄』など、共著による映画本も多い。

書誌情報

書名：日本映画作品大事典

編著者表示：山根貞男 編

発売記念特別定価：41,800円（本体38,000円＋税10%）2021年12月末日まで

定価：47,300円（本体43,000円＋税10%）

体裁：B5判・1,072頁（予定）・本製・布クロス貼・筒函入

ISBN：978-4-385-15903-4

発売予定：2021年6月中旬

【三省堂について】 **おかげさまで株式会社 三省堂は、2021年4月8日で創業140年を迎えます。

会社名：株式会社 三省堂

本社所在地：〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2丁目22番14号

創業：1881年(明治14年)4月8日

代表取締役社長：瀧本多加志

資本金：7,000万円

従業員数 147人（2021年1月現在）

事業内容：辞書、事典、学習図書、一般図書、電子出版物、小学校・中学校・高等学校教科書の出版・販売、情報提供サービス

【お問い合わせ窓口】

株式会社 三省堂 営業企画部営業企画課

Tel：03-3230-9562

E-mail：www-info@sanseido-publ.co.jp